

今日^{きょう}は復活節^{ふっかつせつだいさんしゅじつ}第三主日^{だいさんしゅじつ}です。今日^{きょう}の福音^{ふくいん}は、復活^{ふっかつ}されたイエス様^{イエスさま}の三回目^{さんかいめ}のご出現^{しゅつげん}について語りながら、イエス様^{イエスさま}の慈しみ^{いつくしみ}と憐れみ^{あわれみ}、また、愛^{あい}を見せてくれます。今日^{きょう}の福音^{ふくいん}で、イエス様^{イエスさま}はペトロ^{ペトロ}と六人^{ろくにん}の仲間^{なかま}たちに現れ^{あらわ}、彼ら^{かれ}の漁^{りょう}を助けて^{たす}くださいました。その次第^{しだい}は、ペトロ^{ペトロ}が「わたしは漁^{りょう}に行く。」^いと言^いい、そこで、他の六人^{たろくにん}も一緒^{いっしょ}に出掛^{でか}けたということから始^{はじ}まります。彼ら^{かれ}は夜通^{よどお}し労苦^{ろうく}して漁^{りょう}をしましたが、何も取^{なに}れませんでした。しかし、夜明け頃^{よあけころ}、岸^{きし}に現^{あらわ}れたイエス様^{イエスさま}の助け^{たす}をいただいて、多くの魚^{おおさかな}を取^とることができたのです。それから一同^{いちどう}はイエス様^{イエスさま}と共に朝^{あさ}の食事^{しょくじ}をし、その後^ご、イエス様^{イエスさま}はペトロ^{ペトロ}と話し合^{はな}いながら、彼の使^{かれ}命^{しめい}を改^{あらた}めて悟^{さと}らせてくださいました。

今日^{きょう}の福音^{ふくいん}を黙想^{もくそう}しながら、わたしはペトロ^{ペトロ}の心^{こころ}と行動^{こうどう}が気^きになりました。彼は突然^{かれとつぜん}漁^{りょう}に行こうとしたようです。その時^{とき}の彼^{かれ}の心^{こころ}はどのような状態^{じょうたい}だったのでしょうか。なぜか、寂^{さみ}しいようにも見^みえます。ペトロ^{ペトロ}のその突然^{とつぜん}の行動^{こうどう}が気^きになったのか、他の六人^{たろくにん}も彼^{かれ}と一緒^{いっしょ}に出^でかけました。しかし、彼ら^{かれ}の漁^{りょう}は失敗^{しっぱい}しました。しかも、疲れ果^{つか}てた彼ら^{かれ}には食^たべる物^{もの}すらありませんでした。そのまますべてを諦^{あきら}めて家^{いえ}に帰^{かえ}らなければならなかったでしょう。その時^{とき}、イエス様^{イエスさま}が彼ら^{かれ}に現^{あらわ}れ、「舟^{ふね}の右側^{みぎがわ}に網^{あみ}を打^うちなさい。そうすればとれるはずだ。」とおっしやったのです。すると、舟^{ふね}に網^{つな}を引き上^ひげることができないほど多^{おほ}くの魚^{さかな}を取^とることができたわけです。その時^{とき}、イエス様^{イエスさま}が愛^{あい}された一人^{ひとり}の弟子^{でし}がペトロ^{ペトロ}に「主^{しゅ}だ。」^いと言^いいましたが、その声^{こえ}にペトロ^{ペトロ}は、はっと昔^{むかし}のある出来事^{できごと}を思い起^{おも}こしたでしょう。思^{おも}わず上着^{うわぎ}をま^みとって湖^{みずうみ}に飛^とび込み、イエス様^{イエスさま}に向^むかって泳^{およ}ぎ始^{はじ}めたのです。ペトロ^{ペトロ}の頭^{あたま}に浮^うかんだのは、自分^{じぶん}が初^{はじ}めてイエス様^{イエスさま}に呼^よばれた時^{とき}のことでした。あの時^{とき}ペトロ^{ペトロ}はイエス様^{イエスさま}を疑^{うたが}いながらも、イエス様^{イエスさま}の指^し示^じに従^{したが}って漁^{りょう}をし、多^{おほ}くの魚^{さかな}を取^とった後^{あと}は自分^{じぶん}のすべてを捨^すてて、イエス様^{イエスさま}に従^{したが}う弟子^{でし}としての道^{みち}を歩^{ある}き始^{はじ}めたのです。その思^{おも}い出^でが浮^うかんでから、ペトロ^{ペトロ}はもはやそのま^{ふね}ま舟^{ふね}にいられませんでした。百^{ひゃく}メートルの短^{みじか}くはない距離^{きょり}

を泳いで、イエス様のおられる岸に行ったのでしょうか。それからの彼の行動は正気を失った人のようにも見えるほどでした。彼はイエス様が「今とった魚を何匹か持って来なさい。」とおっしゃったとたん、急いで船に乗り込んで、六人が引き上げられなかった重い網を陸に引き上げました。一体なぜ、ペトロは突然漁に行き、また、イエス様に会ってからは、正気を失ったかのように行動したのでしょうか。それは勿論、イエス様と再び出会ったからとも言えますが、他の理由もあるのではという気がします。

きっとペトロは、これから自分がどう生きるべきかが分からなかったでしょう。イエス様は復活されましたが、三度もイエス様を裏切ったペトロは、まだ死んだままだったかのようにでした。彼は機会があれば、罪深い自分をイエス様に赦していただきたかったはずですが、彼にはまだその機会が与えられなかったし、与えられたとしても勇気が出なかったでしょう。そこで、彼は自分の元の仕事、すなわち、漁に夢中になってでも、自分のすべての過ちを忘れたかったかもしれません。そんなペトロに現れたイエス様は、彼にもう一度立ち上がる機会を与えてくださったのです。岸に立っておられたイエス様は、夜通し何もとれなかった弟子たちに多くの魚を取らせ、彼ら、特に、ペトロをイエス様との初めての出会いの現場に導かれました。ペトロにとってその導きは、イエス様に赦されるに逃してはいけない機会だったでしょう。そこで、彼はもっと積極的に行動したに違いありません。それほど、彼は何とかしてでもイエス様に赦されたかったからです。しかし、イエス様は急ぎませんでした。イエス様にとって大事なものは、夜通しの漁で疲れ、また、飢えに苦しんでいる弟子たちを食べさせることと、慰めることだったでしょう。

その朝の食事の後、イエス様はペトロと話し始められました。それはイエス様が質問し、ペトロが答える形でしたが、イエス様の三回の質問はただ一つ、「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ということでした。ペトロは二回までは堂々と「はい。」と答えましたが、それもイエス

様に認められたかった彼の心の表れだったでしょう。しかし、三回目には悲しみ深い声で、「主よ、あなたは何もかもご存知です。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」と答えました。彼は自分の弱い信仰を素直に認め、更に、自分のすべてを捨てて、イエス様に自分自身を任せることとしたのです。ところで、イエス様は彼の答えごとに「羊を飼いなさい。世話をしなさい。」と命じられました。それは「わたしを愛しているならば、同じ愛で、わたしの羊を飼い、彼らの世話をしなさい。」という意味でしょう。こうして、イエス様はペトロを赦し、また、彼が歩むべき道を示してくださいました。その道とは羊の群れを飼う道、世話する道、彼らに仕える道であり、その道を歩むことによって、イエス様への愛を証しすることができるのです。でも、それはただペトロだけにではなく、他の弟子たちやわたしたちにも当てはまることでしょう。

実は、今日の福音に登場したその七人の弟子たちは教会を象徴していて、わたしたちは今日の福音が教会について話しているのが分かります。改めて、茫然としていたペトロと一緒にいた六人の弟子たちを考えてみたいと思います。きっと彼らはペトロの支えとなったでしょう。そして、彼らもペトロと一緒に復活されたイエス様に会い、自分たちの使命を再び悟ったはずで、わたしたちは皆、弱い信仰、希望、愛を持って信仰の道を歩みながら、度々、その道から離れがちな者です。ですから、互いに支え合い、世話し合い、愛し合うべきで、そのように生きる私たちの真ん中に、イエス様はおられるはずで、これからも、この信仰の道をみんなで共に歩み続けましょう。